

コリント人への手紙第一 10 章 14-22 節「主の食卓に与る者として」

小池 宏明 牧師

パウロは、以前にも取り上げた「偶像に捧げられた肉」の問題に話を戻している。当時のギリシア・ローマ世界では、偶像の神々を祭った神殿で食事会を開くことがよくあったようだ。偶像の神々の前で、偶像に捧げられた肉を食することは、偶像の神々と交わることにもある危険性を持つとパウロは考える。

* 聖餐式はキリストとの交わり

一方、パウロは、主の食卓（聖餐式）に与ることは、主イエス・キリストと交わることになると言っている（16 節）。このことは、旧約時代のイスラエルの民が、主なる神様の祭壇の前で、供え物としてささげた羊を焼いて、祭司と共に食べたことと関係している（18 節）。祭壇の交わりに与ることは、眼には見えないがご臨在なさる主なる神様と交わることになる。

* 偶像の神々との交わりは悪霊との交わり

偶像の神殿における捧げ物や食事には、特段の意味はない。もし、偶像に捧げた肉に、何かの意味があるとして食べないならば、偶像を恐れて、偶像が実在していることを証ししているようなものだ。しかし、偶像は、単に木材や石材の塊に過ぎないから、完全に無視していればよい物とも言えない。20 節「むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」偶像には、人々を惹き付ける力がある。眼に見える偶像は、肉眼では見えない霊であられる主なる神様から、人々を引き離そうとする強力な力、悪魔的な力があるのだ。21 節「あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。」私たちが本当に主なる神様との交わりの中にいるなら、悪魔が支配する偶像との交わりの中に入るなどできない。

* 主の食卓に着いている者として

今日、私たちも、主の食卓に与る者として、悪魔の食卓に着くことがないように、注意したい。私たちクリスチャンは主イエス様を信じて、主イエス様につながる者になった。だから偶像や悪霊と一体になることはできない。偶像が溢れている日本にあって、偶像礼拝になるのかならないのか、見分ける目が必要だ。もし私たちが、偶像の神々と交わりを持っているなら、主なる神様は激しく怒られる。それは、主が私たちを愛しているからだ。私たちは、主の純粹で、一途なご愛に気付いて、真剣に主なる神様に向き合い、主を愛する者へと創り変えられていきたい。